

年賀状交換の同時性

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

年賀状は元旦に受け取りたい。相手にも元旦に受け取ってほしい。つまり、自分が新年の挨拶を受けているその瞬間に、遠く離れた場所にいる相手にも、自分のお祝いの言葉が届いていなければならない。

こういう年賀状交換の同時性を求める人が多いようだ。郵便局もこの要望に応えるために、年始年末には大変な苦勞をしているらしい。職員やアルバイトを総動員して、できるだけ元旦の配達で片付けようとするのだが、最近では、正常に出されたものでも2億通ぐらいは、二日以後の配達に持ち越されてしまうそうだ。

12月20日までにポストに入れないと元旦には届きませんというのが、もう何年も前からの郵便局のルールらしいが、最初の頃は、元旦には届かないかも知れませんといった調子で、かなりニュアンスが異なっていたように思う。

私が若い頃は、年末に慌てて年賀状を書いて大晦日に投函しても、近隣の府県だったら、元旦に届くことさえ珍しくはなかった。最近では、12月20日以前に出しても元旦に届かないという苦情が寄せられることもあるという。

そういった苦情も含めて、元旦に年賀状が届かないという抗議が郵便局に集中するそうだが、人々はいったいどんな方法で配達遅れの事実を知るのだろうかと思はついでに考えてしまう。

元旦に知人の家に電話して、自分の年賀状が届いたかどうかを確かめる人がいるという笑い話さえあるが、人々が儀礼交換の同時性に想像以上に神経質になっていることは確かであろう。

職場では、上司、同僚、部下が顔をそろえて仕事納めの挨拶を交わすのが慣例になっている。しかし、それよりはるかに以前から、みんなは秘密裡にお互いどうしへの年賀状を書いて投函しているのだ。

そして、仕事始めの挨拶で再び顔を合わせるまでは、年賀状についてはだんまりを続けている。ところが、いざ会って話してみると、自分がせつかく元旦の配達を期して投函しておいた年賀状が、まだ相手のもとには届いていないことを知って驚かされたりする。

日常生活の裏面で仕組まれた非日常的な儀礼の交換が、何ものにも揺き乱されず、平穩に進行していれば全く問題はないのだ。そんなことはおくびにも出さずに、日常的な生活を続けていけばよい。ところが、いったん狂いが生じた時は、それをいかに正常化するかということが問題になる。

自分の新年の挨拶が、元旦早々相手の手元に届くようにと、どんなに神経を使い、どんなに努力したかということを説明して、自らの誠実さを示さなければならないのである。

というのも、年賀状は、発送と受け取りが一致しなければならないという鉄則があり、どちらか

が遅れば非礼になるからである。つまり、年賀状を交換する者は、いずれも元日に同時にそれを受け取らねばならない。どちらかが遅れたら儀礼交換の意味を失うからである。

それでも、遅れた原因が郵便局の対応にあれば許せるであろう。以前は、正月前に出された年賀状には12月の消印が押されたものもあって、それを見れば、同時性を保とうとした相手の意思が伝わってくることもあった。

しかし、許せないのは、自分の年賀状に対する返礼として届いたものである。そこにも色々な事情があって、先生や師匠、先輩や上司のうちには、自分からは絶対に年賀状を書かない人もいる。来るのはいつも返信ばかりなのだ。

しかし、この人たちにとっては、年賀状の意味が異なるということをおかねばならない。年賀状には、年齢や長寿を祝う意味もあって、それは年下の者が、先に生まれた者へ一方的に送れば済むものである。お祝いの対象は、相手の人間、年齢、地位などにあるので、相手は必ずしも同等の祝賀を返す必要はないのである。せいぜい祝ってくれたことに対するお礼の言葉があれば充分であろう。

これに対して、年賀状にはもう一つの意味があって、人々の行動習慣となり儀礼化している点から言えば、これが年賀状の本来の意味だと考えてもよいであろう。それは、一年の最初に在ることを祝う挨拶であって、どちらが年上かなどということとは関係なく、ただ新しい年の同じ出発点に立った者どうしが、一緒に生きていることを悦び合う、同時的で同等な祝賀にほかならない。

こういう儀礼交換の同時性、同等性を保つために、正月早々、誰々は年賀状をよこさなかったとか、あの人は常に返事しか書かないとか、来年はもう出すのは止めようなどと細かい対人関係の有り様を考えているとしたら、なんともミミっちくて、神経質な一年の始まりとは言えないだろうか。

だが、そういうミミっちさの中に、実は、儀礼交換の同時性の本質が隠れているのである。

政治学者のモーゲンソーは、次のような話を伝えている。セオドア・ルーズベルト大統領は、元日に各国大使公使の全員と会見し、年賀の言葉を交わしていた。タフトが27代大統領になってからは、この習慣が変わった。彼は、各国の大使と公使を別々に引見することになったのである。

1910年1月1日、このことを知らなかったスペイン公使がホワイトハウスへの入場を拒否されるという事件が起こった。スペイン政府は、急きょ公使を本国へ呼び戻し、アメリカ政府に嚴重抗議を行ったのである。

もう一つ、これは年賀の挨拶ではないが、1945年のポツダム会議での紛糾が挙げられる。チャーチル、スターリン、トルーマンの誰が最初に会議場へ入るかで折り合いが付かなかった。結局、三人は、別々の三つの扉から、ヨーイドンの合図によって同時に会議場に入ることによって、それぞれの国家の威信 (prestige) を保ったのである。

挨拶の前後関係で地位が定まる。部下に対しては常に返礼しかなしない上司がいる。隣近所の人に挨拶するのが思いのほか難しいのも、一つにはこの理由による。

儀礼の形式を突き抜けて、内容としての祝いに到達するためには、どうしても同時性ということが必要なのである。部下に常に返礼しか書かない上司は、儀礼を行っているのであって、正月とい

う時間を祝っているのではない。

正月という時間を真に祝うためには、全員が同等に、個人としてのプライド (prestige) を保ったまま、共にこのハレの日を祝うという同時性がどうしても必要なのである。

元旦に年賀状が着くようにと郵便局が音頭を取り、国民全体がそれに歩調を合わせているのを見ると、日本はなんとも平和な国であり、日本人はオメデタイ国民に見えるかも知れないが、そのオメデタさがハレの日には必要なのだ。

[2008/01/12 magmag]